

築地川

芝木好子



講談社

築地川

昭和四二年九月二〇日第一刷発行

著者 芝木好子

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二一二二一 振替 東京三九三〇
電話 東京(九四三)一一一一(大代表)

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 大製株式会社

定価 四九〇円

落し本・乱し本はお取り替えます。
©芝木好子 昭和四二年 Printed in Japan

築
地
川

裴
川
田
幹

その日、「森むら」へ勤めるようになって初めて四谷の下職の家まで使いに出了た萬里子は、馴れないので手間をとり、帰りのバスで銀座へ向ったのは日暮であつた。疲れた目で窓から外をみると、バスは半蔵門にさしかゝつて、宮城の濠端がゆつたりと現れた。高くめぐらした石垣の下の堤はなだらかに濠へ傾斜して、見事な松が枝をひろげている。濠端にそつてバスは降りはじめた。一枚絵を展くように端正なけしきがめぐつてゆく。この眺めが尽きると裾に下町が続くのである。萬里子は疲れるとすぐ出る熱っぽいけだるさを感じながら、見るともなく移ろうさまを眺めた。下職の家で思いがけなく耳にしたことが、感じ易い年頃の彼女の胸にしこつて離れない。そのことを帰つて兄に話したものでどうかと考えていた。

下職の家は銀座森むらの専属の工房で、四谷の露地にあった。萬里子は粗末な下職の仕事場を見るのも初めてであった。四角い畳敷きの大部屋の窓に向って仕事机が並んで、数人の染色する男女が座っていた。革に蒔絵染めをほどこす仕事で、小さな電熱器に容器をのせて蠟を煮ている。その油脂の匂いと皮革の匂いとが部屋に充満して、蒸れるように息苦しい。蠟を溶かしておくには、四季を通じて室内の温度を保たなければならぬので、空気の流れが悪かった。その中で染色の熟練者たちは器用な手付で彩色している。ハンドバッグや財布の革地に淡い色から染めつけて、蠟で伏せてゆくのであった。下絵はこれまで主人の仕事であったが、女子短大の美術部を出たばかりの萬里子も手伝うことになって、今日二枚の図案を届けにきた。

奥の座敷で図案を眺めた一徹そうな主人は、良いとも悪いとも言わない。萬里子是不安な気持ちで座っていた。主婦がお茶を運んでくると、主人は別のことを言った。

「築地のお年寄はお幾つにおなりです」

「八十歳です」

「いつもお元気ですね。私が森むらへ奉公に上った四十年前と大して変っちゃいませ

んよ」

萬里子は返事に困った。祖母は若造りだが、この頃はさすがに老いが目立つ。

「森むらの先代と築地のお年寄は兄妹だけにそっくりでした。目鼻立ちの調った、面長な顔は立派ですからね。先代のところへ歌舞伎の役者が挨拶にくると、どちらが役者かと思うようでした」

仕事にはやかましそうな主人も、昔のことを話すときは和やかになった。お茶を出したままそばに座っていた主婦は、素顔に近い萬里子の顔を熱心に眺めていた。森むら一族の顔は遠くから見てもわかるほど彫が深く、目も大きく切れ上って、羽子板にでもなりそうな顔である。主婦が萬里子の顔を眺めているのは、森むらの顔を発見出来ないからであろう。彼女は春霞のようにやわらいだ、色の白い、小さな顔であった。

「大きくおなりになりましたね。入っていらした時どきりとしましたよ、若い時のお母さんにそっくりで」

主婦は感に堪えたおももちであった。不意だったので、萬里子は胸を衝かれた。主

人は当惑したふうで細君の顔を見たが、彼女は氣にもかけなかった。

「お母さんを覚えていらっしゃいますか」

萬里子はこれまで眠っていた母の記憶をたぐってみても、戦後にわずか一歳あまりで別れた母のことはなにも残っていなかった。

「覚えていません」

「さようでしょうとも、二十年も前のことです。戦争中、私の埼玉の実家へ野菜の買出しにいらしたことがありましてね。華奢な方でしたから重たいリュックが痛々しいほどでした」

主婦はきちんと膝を揃えて座ったまゝ、萬里子の顔から目を離さなかった。

「いつでしたか、もう十年も前になりました。うか、渋谷駅でちらとお見かけしましたが、声をかけるひまありませんでした」

主人が咳ばらいをしたので、彼女は黙った。萬里子は思い出したこともない母親をつきつけられた気持であった。主婦は渋谷駅で見失ったことを残念そうに告げている、ありふれた好奇心ともれなかった。主人が仕事の話をはじめたので、萬里子は

さっきから氣になっていた二枚の図案のことを訊ねてみた。その図案を纏めるのに二週間もかゝっていた。

「やってみましょう」

主人はそれだけしか言わない。森むらから廻されたものを拒むことも出来まいという表情であつた。彼女はくじけた氣持で挨拶すると、早々に立上つた。この後も一月に一度や二度は図案を見せにくることになるのだろうか、うまくゆく自信はなかつた。主婦は仕事場の出口まで送ってきて、萬里子の兄や姉のこともたずねた。これから来る度に母親の顔が主婦の目に映るのだろう。渋谷駅を歩いていたという實在感に彼女に重たくのしかゝつた。物心ついてから両親のいない生活に馴れていたのに、突然母を感じるのとはかえつて不安であつた。母の柳子は三人の子供を置いて家を去つた女である。彼女が去つて五年後に父の博史も亡くなつてしまい、一家はさびしい月日を過した。博史は晩年に後妻を迎えたが、彼が死ぬと後妻はすぐ出ていった。萬里子は母というと一年ほど暮したその継母の顔が浮んでくるが、一家は誰もその女のことを口にしなかつた。母という存在が彼女の心にうまくかたちをとつていないのは、縁

八
の薄いせいであろう。華奢な肩に大きなリュックを背負って歩いたという母と、自分たち兄妹を見捨てた母とはうまく映像が重ならない。彼女は当時一歳あまり、兄は六歳、姉は八歳であったから、他の二人はもっとはっきりと母を思いうかべるかもしれない。

宮城の濠端をめぐったバスは、車にもまれながら、のめるように下町へ入ってゆく。銀座は灯ともし頃で、日暮の物憂さから蘇生する時間であった。バスは一旦停ってから真直に走り出して、銀座四丁目の交叉点を越える。森むらの店へ寄るにはひどく疲れていた。銀座を横切ったバスは築地へ出る。萬里子は築地川の橋の袂で降りた。万年橋から左手の上流に向けて川の両側は車道で、祝橋、亀井橋、三吉橋と続く。三吉橋から先は新富町である。上流といったのは方便で、築地川とよんだこの掘割川には水がない。四年ほど前から高速道路になって、川底はコンクリートで固められ、自動車が走っている。築地や新富町を囲む築地川は、町中をめぐってゆくが、この支流も少しづつ埋め立てられてゆく。隅田川から流れこむ掘割の水は、町中をめぐってまた隅田川へ還っていったものであった。潮の満ち干はしぜんにあって、底をの

ぞかす引潮と、潮の香のする満潮とがあった。萬里子の覚えている築地川はいつも澱んでいて美しいとはいえなかったが、この道が好きであったし、川は生活の背景になっていた。祖母の勢以の若い頃はこの川に水泳場があつて、岸に氷水屋も出ていたし、川岸には舟虫や蟹が這つていたという。新富町の斜めわきは明石町で、隅田川に臨んだ居留地であつたから、祖母の娘の頃は赤煉瓦に蔦の這う神学校や金の十字をつけた天主教教会や、エキゾチックな白堊館のホテルがあつて、異国情緒の濃い地域であつたと聞いた。祖母の得意になつて喋るのはいつも昔話で、このホテルの窓下は佃の入江であつたことや、洋風の帆船が入つてしたことなどであつた。居留地には外人の住居があつて、金髪の女が西洋人形のような子供を連れて歩いているのを、勢以は魅せられたように足を停めて眺めたのである。今はおもかげもとどめない町であつたが、この川筋まで戻ると、萬里子はほっとした。

ついこの間まで貸ボートの浮んでいた川に自動車走つてゆく。新富町に差しかかる橋の袂に、夕闇にうまく染つて、格子のスポーツシャツだけ浮いて見える若い男が立っていた。萬里子の方で気付くよりも、相手が先だつたろう。彼女は駆けていっ

た。待ち受けながら彼は目を凝す。家を出た朝と、帰ってきた今と、萬里子の顔を確かめるのが長年の習慣になっていた。

「萬里子、早かったね」

「お店へ寄らないできてしまったの」

彼女は兄の顔をみると気持がほぐれて、橋桁に寄りかゝった。遅く帰ってもこのところ兄の泰は待っている。勤めはじめてまだ調子のとれない妹を氣遣っていた。彼等の家から五十米と離れない橋の上なので、勢以は氣が知れないという。五十米先に見ることに意味がある。雨が降れば傘が意味を深めてくれる。彼女はこの橋を兄に背負われて渡ったことも数えきれない位にある。祖母は泣く子供と、病氣の子供が嫌いであつた。萬里子が大腸カタルを患って、笛のように泣くと、祖母はいらいらし、姉の律子は勉強が出来ないといつて鉛筆を投げ出した。泰は猫のように身体にしないのない病み上りの妹をおぶって、橋の上を往ったり来たりした。上背のある彼の背中は寝心地がよかった。また大腸カタルの快復期に与えられる一枚のビスケットもどんなに待遠しかったか。二枚欲しいといつても彼は医師の言いつけに従って、呉れな

かった。きれぎれに泣くと、祖母は内緒で二枚おやりという。彼は代りに背負つて外へ出る。川沿いに歩きながら銀座の灯の見える万年橋まで行つて、歌舞伎座の囃子の音を聴いてくることもあったし、ボートの浮ぶ川をのぞくこともあった。

「自分で下職のうちへ行つたのかい」

泰は妹の顔へ問うた。萬里子は下職の夫婦が自分たちをよく知っていたことは、口にできなかった。

「下絵、なんていわれた」

「なんにもよ。きつと氣に入らなかつたのね」

「なんにも言われなければまだろ。職人が結構ですと言やしないよ」

泰は言つた。森むらの古い職人は頑固にきまつている。大伯父の時代からそういう職人や店員がいた。図案をとにかく受取つたのは見つけものといわなければならぬ。

「文句がなければ上等じゃないか」

泰は橋桁で伸びをした。彼の顔は眉も目もきりつとした森むらの顔である。歩きか

けた泰は、夕闇の中で妹の顔をすかして見た。勤めはじめてから疲れが目立つ。病気が再発してはことだった。彼女を医師に見せる時期はとうに來ていた。虚弱な妹の健康管理は彼の役目であった。妹は十歳まで生きられるかどうかと思っていた。その年をすぎると、医師は十九歳が峠であろうと言った。その年齢も無事に越したが、薄氷を踏む気持から解かれたわけではない。妹は胸部疾患で、十九歳から一年間療養所へ入った。そのあと短大を一年おくれて出たが、二十一歳の今日も安心と言えない。疲れがそのまゝ描いたように顔に出る。勤めは無理かもしれなかった。

二人の家はこの橋から逸れた通りの、川を背にした場所にあつて、橋からも見える。町場のことで家が立てこんで、その中の煮しめたように古い三階家である。大正の震災にも、戦災にも焼け残った下町なので、全体に黝ずんで、三軒長屋のしもたやもあれば、銅で表てを張った問屋や、黒板塀の旅館もある。家と家が密着して支えあう古風な、滅びかけた、しかし趣きの残る町である。家によつては饅えた生活の匂いが漂っている。兄妹は露地の内玄関から二階へ上った。階下は貸事務所で、父の生きているところ、こゝは森村医院であつた。

黒光りする二階の表座敷で勢以は夕刊を読んでいた。目をあげると、かっきりした顔は調っている。黒く染めた髪を夜会巻きにして、六十歳ほどにしか見えない。背中も真直で、緊った身体つきに、手や足が大きいのも泰と共通している。二人は病気をしたことがない。

「東六の家へ行つたって？」

勢以は人を見るとき、ぎろりと目が動く。どこにも就職口のない孫を実家の森むらへ押しこんでから、愉しみがふえた。毎日店の様子を聞くだけでも退屈しない。藤緞染めの職人は東六郎といって、店の人たちは東六と呼んでいることも、勢以の方が詳しかった。森むらには二代続く店員も多いから、勢以は今でも彼等と呼ばれてゐる。萬里子がおどおどと図案の出来を訊ねたと知ったら、勢以は舌打するに違いない。息子を亡くして生活が窮屈な今でも、昔の権高さを失わなかった。孫の描いた絵柄がハンドバッグになつて銀座の飾り窓に出る日を、彼女はたのしんで口にした。

「東六に念を入れさせなくちゃね」

萬里子は泰の顔をみた。図案を採用しないかもしれない職人に、差し出口をしたら

困ると思った。六十年も前に結婚して分家した老女が、今だに実家を我が家呼ばわりしているのは、周囲の気持を知らなすぎるのであった。勢以の日常には八十年間森むらがついて廻っている。店が日に日に変わっても、彼女のなかの森むらは一向変わっていなかった。夕食どきに彼女は割烹着をつけるといことがない。着物の袖をぶら下げたまゝ、食膳を調える。一日おきに通いの手伝いがきたが、来ない日は料理も店やものを頼むのが常で、天ぶらは天ぶらやから取りよせ、カツレツは洋食屋に注文する。いそがしい商家と同じように自家の手を省くのであった。食べものに贅沢で、魚屋から酔いものまで運ばせ、自分で作ることはなかった。

この家で長女の律子が一番あとに帰ってくる。服を着替えると、手を洗って、うがいする。食卓に座ると夕刊をひろげた。誰と口を利くでもなく、食卓が揃うのを待っている。一日いっぱい日本橋の薬局で働いてきて、この家の経済をなかば負っているので、勢以も一目おいていた。

「萬里子が東六に蒔繪染めの図案を描いてやったと」

勢以は律子へ言った。